

「越前おろし蕎麦」の

名付け親は昭和天皇だった？・・・天皇家と蕎麦のご縁

大正・昭和両天皇の「蕎麦好き」は有名な話です。

大正天皇（在位一九一二～一九二六）がまだ東宮だった頃、陸軍の参謀本部旅行演習に参加して彦根に宿泊をされた折に、伊吹の「山蕎麦」の説明をお聞きになり、「朕にその蕎麦を取り寄せよ」と随行していた当時の滋賀県知事川島純幹氏すみもとに命ぜられたといっています。早速坂本の「鶴喜そば」（創業享保元年・一七一六・現存）から取り寄せたところ、その美味なことに痛く感動され、明治天皇へのお土産にされたというエピソードが残っています。坂本にある鶴喜そば本店の正面玄関上の破風には「東宮殿下賜御買上之栄」の木の額が今も架かっていて当時を偲ぶことが出来ます。

また、明治四十年に山陰地方に行啓され出雲市に宿泊された折、皇太子が蕎麦を所望されたので地元の老舗蕎麦屋羽根屋（創業・江戸時代末期）から蕎麦を取り寄せ差し上げたところ、大変満足され羽根屋に「献上そば」の名の使用を許されたという逸話もあるほどそばが大好きだった

たようです。現在も、鶴喜そばと同様、羽根屋も「献上そば」を看板に老舗蕎麦屋として営業を続けておられます。

天皇即位前の大正天皇は奔放なご性格で、突然お一人で蕎麦屋に飛び込んでしまうなど予測できない行動をとられることが俤あり、側近を困らせたと伝えられています。（原武史著「大正天皇」）

ところが同年七月二十九日明治天皇が逝去され、天皇に即位（大正天皇）され、その後体調を崩されてしまい、残念ながら蕎麦とのご縁を伝える伝聞は残されていません。

戦後を迎え、天皇の行動の自由度が広がったためでしょうか、昭和天皇と蕎麦をめぐる話は激増します。

昭和二十二年・第二回国民体育大会秋期大会にご出席の際に福井・武生を訪れた天皇を、同行した天皇の料理番・秋山徳蔵氏（出身地が旧武生）が市内の老舗蕎麦屋「うるしや」（創業は文久元年・一八六一年・一時廃業するが・二〇一九年四月再開業）にお連れし、「おろしそば」をお出ししたところその美味なことに驚かれ、東京に帰られた後も折りに触れ「あの越前の蕎麦は美味かった！」と側近に話されたことが福井の蕎麦業者に伝わり、すっかり感激してしまった地元の蕎麦屋達が使っていたのが始まりで、「越前おろしそば」の名前が定着したともつばら伝

えられています。これが「越前おろしそば」の名付け親は昭和天皇であるといわれる所以なのです。

また、昭和二十九年、巡行先の北海道・釧路では竹老園東屋総本店（創業・明治七年）を訪ねられ、「おいしい、おいしい」とお代わりを二回もされたといえます。宮内庁主膳部の内規によって「生姜、酢、わさび、葱の薬味」は全てご法度、茶そばに使う抹茶も昂奮作用があるというところで、献立は「蘭（卵）切りそば」（水を一切使わず卵だけでつなぐ）と薬味として大根おろしのみということになりましたといえます（「東屋の公式サイト」より）。

その他、埼玉県飯能市の「竹むら」、長野県諏訪市の「そば処八州<sup>やしま</sup>」、長野市善光寺の「小菅亭」、長野県戸隠の「大久保の茶屋」・・・等々、昭和天皇が訪れられた蕎麦屋は数多いのです。

このように行幸の際、好んで蕎麦を食されたことは良く知られている通りですが、御所での昭和天皇の日常生活はどのようなものだったのでしょうか？

当時の料理番・谷部<sup>やへ</sup>金次郎氏の回想録「昭和天皇と鰻茶漬」で昭和天皇の日常生活を追ってみようと思います。

昭和天皇はご自分の好みを決して口に出されることはなく、予算の枠

内で作られる料理は一般家庭のものときほど変わらない質素なもので、谷部氏が感じ取っていた昭和天皇のお好みは「鰻茶漬」と「そば」だったそうです。そばは毎月一回だけ三十日に「晦日みそかそば」としてお出ししていたということですが、谷部氏は「そばのときは、必ずとっていていいほど、お代わりなさいました」、「もっと献立にのせて、十分に召し上がっていただきましたかったと悔やまれます」と述懐しています。よほど蕎麦が大好きだったのですね。

ところで、「天皇と蕎麦」とのご縁は大正・昭和天皇に始まる話ではありません。そもそもの話しになると歴史を千数百年も遡らねばならないのです。

最初のご縁は、第四十四代元正天皇（在位七一五〜七二四年）の時代になります。元正天皇は歴史上五人目の女性天皇ですが、それまでの女帝がすべて皇后や皇太子妃であったのに対し、独身で即位された初めての女性天皇でした。父・草壁皇子、母・元明天皇との間に生まれ、しよくにほん続日本紀には「天の縦せる寛仁、沈静婉せきレンにして、華夏戴せ佇い」（慈悲深く落ち着いた人柄であり艶やかで美しい）とそのお人柄が記されています。

その元正天皇在位中の養老六年（七二二）の夏は例年になく雨が少なく米の収穫が危ぶまれたのですが、飢饉を心配された元正天皇は次のよ

うな詔勅を発せられたと続日本紀（七九七年・巻九）にあります。

「今夏無雨苗稼不登 宣令天下国司勸課百姓、種樹晚禾蕎麦及大小麦、藏置儲積以備年荒（今年の夏は雨が降らず、稲の苗は実らなかった。そこで全国の国司に命じて、人民に勧め割り当てて晩稲、蕎麦、大麦、小麦を植えさせ、その収穫を蓄えおさめて、凶年に備えさせよ）」

実はこの詔勅こそ、我が国で「蕎麦の栽培」（救荒穀物）について書かれた最初の記録なのです。そのようなことから、昭和八年（一九三三）に京都で開催された麵業者全国大会で元正天皇を「蕎麦祖神」と定め、元正天皇の御陵のある奈保山西陵（奈良市奈良坂町）で毎年五月二十二日（元正天皇崩御の日・新暦）に関西の業界関係者によって現在も祀事が執り行われていると聞きます。

いずれにせよ、全国各地に現在のよう個性豊かな郷土蕎麦が育ち、江戸時代を中心に救荒食としてソバ栽培が各地で勧奨された原点は、元正天皇のこの詔勅に発することは間違いありません。

第五十代桓武天皇（在位七八一〜八〇六）も特筆されるべきでしょう。

天応元年（七八一）に即位され在位二十五年に及び、平城京から長岡京に、ついで延暦十三年（七九四）平安京に遷都され、明治維新による東京遷都まで千年に及ぶ京の都の歴史・文化の土台を造られた方です。

延暦寺では、毎年五月十七日に桓武天皇の業績（遷都・延暦寺創建等）を讃え、報恩感謝の念を表す「桓武天皇御講」が行われていますが、数百年にわたって蕎麦を業として栄えているのも、元はといえば桓武天皇がこの地に遷都されたお陰であるとして、地元坂本・鶴喜そばや京都・河道屋の主人が比叡山へ登り、手打ち蕎麦を献ずるのが恒例となっています。

開祖・伝教大師（最澄）が唐から持ち帰ったソバ種が我が国のソバ栽培の始まりであるとする説もあり、五穀（米・大麦・小麦・大豆・小豆）断ちの荒行・千日回峰に挑む修行僧の体力を支えたのも「そば」でした。また延暦寺修業中の親鸞聖人にまつわる「そば食い木像」（注）の伝説もあります。それほど延暦寺と蕎麦の関係は深くて長いのです。鶴喜そばの創業者である喜八は延暦寺の賄い方を勤めていましたし、その縁のためか延暦寺内に現在も鶴喜そばの支店が営業を続けています。

蛇足ながら・・・大津市の電話番号0001番は延暦寺ですが、0002番は、なんと鶴喜そば本店なのです。

（注）親鸞聖人「そば食い木像」の伝説

<https://www.nikkoku.co.jp/entertainment/sobajiten/035.php>